

京都式えらべるデイサービス取組発表会の発表内容

日時	平成20年3月11日(火) 午後1時30分～午後4時40分
場所	京都府職員福利厚生センター3階会議室
出席者	デイサービスセンター等103事業所133人

発表者からのメッセージ

理念について

- ・「えらべるデイは選択行為だけを目的とするのではなく、利用者の豊かなQOLにつなげることが大切。」
- ・「利用者の自主性を大切にすると多目的運営をプログラム化すれば、結果としてグループが形成される。」
- ・「利用者がどう思っているか、どういう最期を迎えたいか、1年後何ができたらいいかを聞く場所が個別レク。」
- ・「利用者ごとのニーズを尊重する点で、小規模事業所か大規模かということとは関係ない。」
- ・「職員自身が将来自分のデイサービスセンターに来たいと言えるようなサービス提供を目指したい。」
- ・「職員長として、職員に自発性を促し、常に『利用者になんてほしいの』と問うている。理念を一言で言えるキャッチフレーズを作った。理念を持っていないと、いろいろな課題に当たったとき『だからできない』となってしまう、乗り越えていけない。」
- ・「従来のお預かりのデイから利用者本位のデイへと転換するという目標を掲げ、えらべるデイを含めてすべての業務を見直した。」

導入経過について

- ・「以前、利用者の中にはぼーっとしている人、1日中話をしない人がいた。一生懸命レクをしてくれている利用者がいても、利用者が職員に付き合ってくれているのではないかという疑問を持った。介護報酬として1人約1万円をもらっており、このままのサービスでよいのかと模索していたところに『えらべるデイ』の話があり、これに取り組みないといけないと思った。」
- ・「事業所からだけの一方向的な提案による集团的プログラム運営の壁を取り除くため、徹底した利用者ニーズの聞き取りから開始。検討会を何度も行った。」
- ・「①記録がたいへん、②職員が不足することが不安であったが、とりあえずやってみることにした。その結果、他の業務を効率よく済ませて、残業時間を減らしたり、レクには全職員で関わられるようにできるようになった。」

実施体制について

- ・「えらべるデイは月2週実施。残り2週は集団レク。利用者も集団での盛り上がり方を知っており、それも残していきたかった。」
- ・「最初は週2回から始め、3ヶ月後に週4日とし、現在では毎日実施している。」
- ・「3ヶ月の活動計画は、徐々に活動を深める内容になっている。これは、利用者がどの小グループに属しているか固定していないとできない（少なくとも利用者が毎回あまりグループを変えないことが必要。）し、これにより、その日楽しかっただけでは終わらせず、活動の継続が実現できる。職員もいつも企画に悩むことはなくなり、負担も減る。」

職員体制について

- ・「職員は毎週同じグループを担当しているが、一人の職員が休んでも他の職員でカバーできるように2班を掛け持ちさせている。」
- ・「グループを担当する職員とフリーな職員を作り、担当職員が手薄なグループがあればフリーな職員が入っていく形にした。」

ボランティアについて

- ・「ボランティアから職員では思いつかないアイデアをいただき、職員の意識改革につながった。」
- ・「ボランティアについては、言葉遣いや接遇に問題もあるし、ボランティアがいないと活動できない状態では困るので、採用していない。」

記録について

- ・「職員が利用者を見守るときに何に注意して記録するのか、一人ひとりの利用者をよく理解しておかないと評価につながる記録にはならない。」
- ・「内容はともかく、まず書くことから始める。そして記録により振り返ることが大切。職員から『ある利用者がこういうことを言った』との報告があって、『なぜ』と尋ねると、『〇〇だから』と答える。『次はどうしたらよいか』と尋ねると、『〇〇したらよいと思う』と答える。それをそのまま記録すればよい。」
- ・「記録する時間が増えたが、利用者のことがより分かるようになった。」
- ・「業務終了時のミーティングで職員全員の共通認識とし、見落とししている点がないかどうか確認をしている。」
- ・「レク目標を通所介護計画に明記、通常のサービス記録表にレク記録欄を設定し、記録の省力化と通常の通所介護計画との連動を図った。」

利用者の変化について

- ・「書道グループは、先生がいて上手になること、作品展を開催することで、利用者は継続意欲が高まる。」
- ・「作品展を家族にも見せるなど、利用者の変化について家族に興味を持ってもらうことも大切。」
- ・「『えらべるデイ』から『えらばれるデイ』にもなる。稼働率が上がり、利用者が休まなくなった。」

職員の変化等について

- ・「それまでレクの準備で残業していたのが実態だったが、えらべるデイだと活動のテーマが決まっているので企画が簡単。残業も減った。その分記録やケアに時間を費やすことができた。」
- ・「えらべるデイを導入して、最初は「たくさんの企画を考えないといけない」という意識であったが、徐々に利用者に「どんなことをしてみたいか」と聞き取るようになってコミュニケーションが生まれた。職員による一方通行の提案から、利用者と一緒にレクを考える形に変化した。」
- ・「準備や資材の買い物は、利用者と一緒にするようにした。時間外の準備はなくした。」
- ・「以前はすべての面で介助していた職員も、あまり手出しをしなくなった。」
- ・「えらべるデイでケアの楽しさが分かったし、生活支援の質の向上にもつながった。」
- ・「職員は、グループを担当することで、記録をしないといけないし、グループの利用者を見ていないといけないので、責任感が出てきた。」
- ・「会議と修正を繰り返すことにより、職員が同じ方向を向くことができた。」

- ・「今後も、利用者の声にアンテナを張り、利用者のニーズに答えられるよう、内容の見直しや変更を行い続ける必要がある。」